

# 稲山会通信

第 45 号

2022 年 7 月 1 日発行

発行人：行方正幸 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

巻頭言：アルピニズム考 稲門山の会事務局長 名達 一彦 (S51 年卒)



パンクロックの雄 Sex Pistols が解散したときに、Beatles の John Lennon が「Rock は死んだ」と言った。また Nirvana の Kurt Cobain は、彼らのアルバム「Never Mind」と「The man who sold the world」の世界的な大ヒットで商業的大成功を納めたとき、もう自分はロックを演奏することが出来ないと、ライフルの銃口を咥えて自殺した。Rock Music が反体制やカウンターカルチャーとしての哲学的・精神的な価値を失ったとき、彼らは Rocker としての存在意義を失ってしまったと直感的に感じたのだろうか。

たとき、彼らは Rocker としての存在意義を失ってしまったと直感的に感じたのだろうか。

「アルピニズム」の歴史もこれに似ている。「アルピニズム」の源流は 18~19 世紀頃からアルプスのモンブランやマッターホルンなど未踏峰への初登攀争いで、それは国家的大冒険だった。そして、半世紀前、「アルピニズム」は世界の最高峰エベレストへ挑戦することに哲学的・精神的な価値を持つようになり、英国が国を挙げて 6 度にわたり挑戦を続け、マロリー、アーウィンら多くの隊員が死んでいったが、それは人類共通の目標＝夢のために払った犠牲でもあった。1953 年にヒラリーとテンジンの初登頂で、未知の世界の扉が開かれて、それ以降エベレストは誰でも挑戦できる山に変わってしまった。

今度はその閉塞状況を打破するために、もっと困難な未踏のルートから挑戦する「スーパーアルピニズム」という、さらに過激なムーブメントが興きたものの、それも 1980 年のラインホルト・メスナーによるエベレスト無酸素単独登頂によってとどめを刺され、登山の哲学的・精神的な価値であった「アルピニズム」は死んでしまったのである。

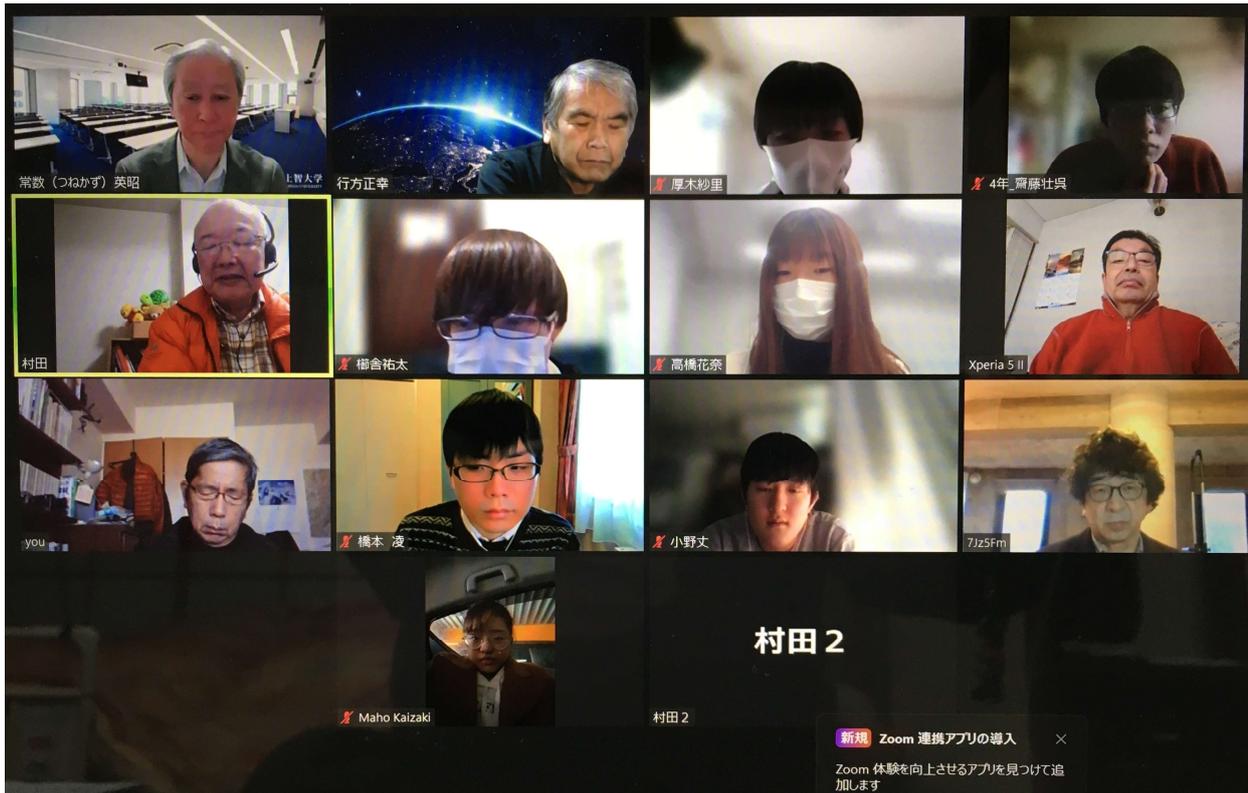
今日エベレストではツアーによる商業登山が盛んに行われ、ベースキャンプは 5 月の穂高の溜沢のように天幕の花が咲き乱れ、年間百人以上の登頂者が出るというエベレストの頂上はお金さえ払えば、誰でも登れる時代になった。

山はもう人生や生命を賭けて挑戦するような価値のある対象ではないようだ。登山というものはスポーツであり、ツーリズムなのだ。

誤解を恐れずに言えば、ポスト・アルピニズム（1980 年代以降）世代の登山者にとってもはや「山の遭難＝尊い犠牲」というようなセンチメンタリズムは通用しない。現代の登山では失敗や不可抗力な事故などは極力排して、安全性という土俵の上で楽しむべきスポーツであり、ツーリズムなのだ。

稲門山の会も時代遅れの老兵から、そろそろ登山をスポーツとして極めるそんな新しい血液の循環が必要だと思う。ただ、そのような新しい血液が中々現れないのが問題なのだが……。

## 【特集 I : 2022 稲門山の会総会】



## (1) 2022 年総会の概要

2022年2月6日(日)10:00~11:30に、常数英昭副代表の司会でオンライン(Zoom Personal Meeting)で総会を開催した。出席者は稲門山の会役員及び役員予定者並びに早大山の会新旧三役13人、ハガキ等による書面決議63通で総会は有効に成立していると報告があり、次のとおり総会が始まった。

## ① 代表挨拶 事業報告等

昨年の12月に逝去された丹藤茂(S53卒)君に黙祷を捧げたあと、行方代表から第1号議案【第2021年度事業等報告】について次のとおりの説明があった。

2021年度の稲門山の会を取り巻く現状については、今年度も全世界的に新型コロナウイルスが猛威を振るい、1月7日~10月1日の間、首都圏、関西圏を中心に緊急事態宣言が発令されたことから、大学の授業、サークル活動ばかりでなく、当会の活動も大きく影響を受け、昨年の総会はオンライン開催になった。

一方、登山界に目を向けますと、緊急事態で県境を跨ぐ移動の禁止や自粛の波で、各地の山開きなど行事も中止となり、予約なしの山小屋やテント場の宿泊は許されず、当会の春のハイキング、秋のハイキングも新型コロナ感染防止の観点から中止することにした。

しかし、当会の活動は、オンラインを活用することにより、役員会(3回)やコーチ会(4回)などの会合は、例年なみに開催することができた。また、会報の発行等も、OBや現役から多数の投稿やご意見をいただき、会報2回、オンライン通信4回を発行した。

現役のサークル活動も個人山行を中心に次第に軌道にのり、長かったコロナ禍のトンネルを抜け出て、やっと光明が見えてきたようだ。その一端をご紹介すると、新人歓迎ハイキング等を含め、個人山行を中心に昨年度は20数回の登山活動が行われた。殊に、6月北岳、7月八ヶ岳、8月槍ヶ岳とステップアップして10月の穂高の大キレットを縦走したのは、計画的な登山の取り組みとして大きな一歩を踏み出し、充実した一年になったのではないだろうか。遭難とコロナによる二年間のブランクで、経験や技術の継承が中断したことから、今年度も引き続き現役学生の技術や施設面での支援をしていく所存です。具体的には本年の夏合宿に必要な大型テント1式を寄贈することとしたい。

まだまだ、コロナの行先は不透明だが、今年度は自粛ばかりではなく是非とも現役学生とOBの合同キャンプや合同ハイキングのようなものを企画し、OBも現役学生も以前のように安全で楽しい登山や親睦を深めることができるよう尽力して参る所存である。

## ② 会計監事報告

続いて柴原OB（会計担当）から別紙(P4)「2021年度会計報告」のとおり、第2号議案の説明があった。2月1日時点の会費の納入者は67人で、昨年は99人で新型コロナの影響等により32人減っている。会費は山の会活動の根幹であり、会費の納入を促進するため、60歳未満の近年卒業者に呼びかけて、新しい名簿をつくる等会員拡大を図り、納入促進を図りたい。

**【ゆうちょ銀行内の振替…振込口座番号：00100 - 2 - 333067：稲門山の会】**

**【他行からの振込…ゆうちょ銀行+店番号(018)+普通預金5130715：稲門山の会】**

## ③ 退任・新任役員と担当の変更

続いて行方代表から次のとおり、第3号議案退任・新任役員と担当の変更について説明があった。

退任役員	倉川秀明(S51年卒)	副代表、コーチ会担当
新任役員	村田宣男(S52年卒)	コーチ会担当
担当の変更	鹿間行喜(S52年卒)	コーチ会担当

その後、議案の採択に入り、第1号議案、第2号議案、第3号議案ともに、賛成73、反対0で、議案に対する意見も特になしということで、採択された。

## ④ その他

総会は約30分で終了したので、残り時間で、新任役員等の自己紹介(P7参照)、海崎前幹事長他旧三役、櫛舎新幹事長他新三役から現役の活動報告があり、30分ほど常数副代表の司会でOBと現役の意見交換を行って、2022年のオンライン総会は閉会となった。



## (2) 会員近況報告

～ 2022年総会の「返信はがき」より～

◆清水正昭(S33) 信州育ちで山に惚れ、民放局で飯を食う。いつのまにやら今年は米寿。ここまで来たらつぎ卒寿? いや、自信ありません。 ◆上田訓央(S33) コロナまん延防止、人流抑制、人数制限、ホームステイ等々、自身を守るべしと家にこもる時間が増える。これが意外に心地良い。比例して体力の低下が確実に認められる。で、どうするかという行動力、気力も低下していることに愕然!! ◆宮野準治(S35) 役員会の各位ありがとうございます。22年度もよろしく願います。昨年、北アルプス登山をどうやら卒業できました。今年から大学院登山(?)を始めるか悩んでいます。具体的な計画はありません。どなたか良い考えをお持ちなら教えて下さい。 ◆新川浩司(S36) 勉強より歩くことがあんなに好きだったのに、悲しいかな一日3km歩くのが精いっぱい。どこかに若さ売っていませんか。 ◆清水保宏(S36) コロナでは今年もまた山に行けることか? ◆廣瀬舜一(S38) 生れてこの方7回目の年男、寅年となり少し体力が落ちています。その代わりに久住高原の原野を思い切り馬で乗り回し人生を満喫しています。 ◆山本貴次(S36) コロナ禍が続く中、皆様、気をつけて頑張ってください。 ◆加納孝治(S37) 役員諸兄、ご苦労様です。今年もよろしく願います。コロナ禍の終息と、来年度の総会を願っております。 ◆東正躬(S37) 稲山会通信をいつも楽しみにしております。 ◆金子弘吉(S37) 総会、新年会等を中止せざるをえない状況が続くなか、しっかりと役割を果たしていただいている役員の皆様に感謝いたします。 ◆内藤錦樹(S37) 坂道の多い買い物で鍛え、日本山岳会の会報、NHKの百名山などを読み楽しんでいきます。 ◆竹内敏(S38) 会誌を見ると若い時はみんな元気だったなと感じる今日このごろです。 ◆打矢之威(S37) 会長はじめ幹事の皆様御苦労様です。齢84になり、精神的に応援するのみで御勘弁下さい。ネパールのシェルパ支援の活動をしています。稲山会会員の御協力を得たいので近々状況の詳細をお送りします。よろしく願います。 ◆栗又功雄(S38) あまり体調も良くなく、医者がよいの日々です。もう一度山に登りたく、リハビリに専念しております。 ◆松村啓之亮(S38) 役員の方々のご努力に感謝致します。コロナのせいにしていましたが、不活発無気力は矢張り老耄のせいようです。高尾山も遠くなりました。現役諸君の山行がまぶしく感じられます。 ◆弘海都子(S38) コロナがこわいので、日常品を買いに行く位で、どこにも行きません。一つだけの楽しみは犬との散歩です。皆様もお元気で過ごして下さい。 ◆白倉俊夫(S38) いつもお世話さます。元気に過して居ります。 ◆平賀守(S38) 自宅で寝たきりですが、歩行以外は至って元気です。山行はテレビで見るものになりつつあります。残念? ◆吉田稔(S38) 総会が中止で残念です。年度中にコロナが好転するようなら、皆さんにお会い出来るチャンスを作って頂けるとありがたい。 ◆秤勤(S39) 体重44kgなるも元気! 家内身体不自由に付き介護の毎日。新年会・総会で皆さんの顔を見たい。 ◆藤井榮二(S39) ご連絡と資料送付ありがとうございました。 ◆笠原豊(S40) 奥秩父の三宝山へ登りたく、瑞牆山荘から入山し金峰山、北奥千丈岳を經由して至り、唐松尾山、長沢山、川乗山を經由して鳩ノ巣へ下山する計画を立てました。足が遅いので食糧10日分では足りないかもです。コロナ禍よ収まれです。 ◆長谷川徹(S40) 稲山会通信44号にて宮野〇

Bご夫妻の「北ア卒業登山」，吉田先輩の「大キレット踏破」等の記事拝読し，大いに刺激を受けました。八十路も少しのチャレンジを実行したいと考えています。 ◆松村葉子(S40) 役員の皆さま，いつもありがとうございます。毎日元気で1万歩目標に歩いています。キスリングを背負い南アルプスなど歩いたことを思い出しながら。 ◆斉藤雄二(S41) 現役が活発に活動されている様で嬉しいです。新型コロナに負けず頑張れ。ほぼ毎日，ジムで足の骨折のリハビリ，手術から1年半過ぎました。ジムでは床で歩行1時間，プールで歩行1時間，だいぶ回復してきました。桜の下でのゴルフを夢見ています。 ◆金子治雄(S41) 今まで病気と無縁でしたが，生まれて初めて2度も長期入院しました。でも元気です。 ◆稲吉豊(S41) 「猫とみて文武に遠き炬燵かな」豊 役員の皆様の献身に感謝申し上げます。 ◆佐久間正昭(S43) 厳しい環境の中，現役の活動が続けられていることを心強く思います。また，通信での諸先輩の山行報告に敬意を表します。当方，2度目の四国遍路を妻と二人で廻っています。21年3，9月に43番まで廻りました。年内に88番まで廻りたいと思っています。 ◆上原敏行(S43) 素晴らしい会報を目にして，役員さんの活動に感謝しています。旧年中は前立腺ガンの為，病院約6割，自宅約4割の生活でした。本年も頑張りたいと思います。 ◆丹治和男(S44) 緑内障の影響もあり，眼に自信がなくなり，先月ついに車を手放しました。さみしい限りです。 ◆島田弘康(S46) 今年から後期高齢者の仲間入りです。最近の用具(登山，ダイビング)を買い揃えてスタンバイ，コロナ禍明けが待ち遠しい。コロナ後の活動に想いを馳せるも，それ以前にこの2年間で衰えた体力・脚力の回復が先か… ◆新井昭夫(S46) 2021年9月に山の会の皆様と上田の独鈷山を登り，温泉を堪能してきました。他は高尾山，奥多摩と登山靴に親しんでいます。コロナでskiにブランクができてしまいましたが，トライしたいものです。 ◆福田榮一(S46) 稲山会通信(第44号)の巻頭言：倉川氏の「山に登らぬ山男」の記事に感銘を受けました。又，後期高齢者の山への熱き思いにも元気をいただきました。右膝痛の治療，リハビリに専念しています。 ◆常数英昭(S49) 都立府中看護専門学校及び荏原看護専門学校で非常勤講師として社会福祉・社会保障を講義しています。また，大田区の福祉事務所に週1回アドバイザーとして勤務しています。今年もよろしくお願いします。 ◆後藤洋一郎(S49) コロナで山に登る機会も意欲も下がってしまいました。“通信”の宮野先輩，吉田先輩の紀行にスイッチを入れ直しました。 ◆岡康彦(S50) OB会の活動有難うございます。会報誌はお互いのよい刺激を感じます。 ◆小竹正雄(S51) 充実した会報を毎号ありがとうございます。記憶の糸をたぐりながら，記事の山々について往時を追懐し楽しい一時を過ごしています。昨年は8月下旬に何年ぶりかで白山に登りました。古希を迎え，体力の減退は如何ともしがたいようです。 ◆石原順三(S51) 西国三十三ヶ所巡礼を終え，四国八十八ヶ所のお遍路を始めています。 ◆倉本弘(S52) いつも楽しく「稲山会通信」を拝見しています。昨年7月から日本の看護職に対する助成事業を行っている公益法人で仕事をしています。 ◆岡安喜久夫(S51) 会報お送りいただきありがとうございます。 ◆米山不器(S54) いつもありがとうございます。元気です。12/16に同年次の丹藤茂君が亡くなりました。 ◆佐々木直之(H17) コロナ禍の中，フィリピン・マニラに引き続き海外赴任中です。

### (3) 新役員の紹介 (村田 宣男 (S52 年卒))

～早稲田大学山の会と越後の山の思い出～

この度稲山会の新役員を務めることになった村田です。自己紹介がてら山の会との出会いや上越の山に関する思い出を書いてみる。

私は子供のころから山が大好きで中学高校ではずっと山岳部に所属していた。大学受験では特段の理由はなかったが、文科系の勉強が大嫌いだったので、早稲田の理工学部を選んだ。幸いにも合格し入学書類と一緒に入っていた小冊子を見るとサークルの案内があり、オールラウンドな登山を目指しヒマラヤやアンデスに3回の遠征実績がある山の会が載っていた。



私の理想にピッタリで会長は理工学部の三田先生、幹事長も同じく理工学部の坂本さんが務めていた。直ちに入会意思を固め、入学式当日に申し込んだ。そもそも、進路について別の選択肢も考えていた私に迷わず早稲田進学を確定させたのは山の会で、学生時代は学業より山登り優先、今振り返ってみても大学生活＝山の会だった。

越後の山に関しては3つの経験が忘れられない。一つ目は無届登山。当時山の会には夏合宿までは新人だけの登山は禁止という規約があった。待望の5月の連休が来ても上級生はみな旧人山行に出かけており、新人の私は山に登れない状況になった。とても我慢できなくて一人で平標、仙ノ倉山登山に出掛けた。雪質も良く快適な登山ができたが、後日発覚して入会早々注意処分を受けた。

2番目は新人合宿。白毛門から巻機山までの3日の合宿であった。登山自体は特に印象が残っていないのだが、山の会が思った以上に体育会系の雰囲気強いことを知った。海外遠征を夢見てより困難な山登りを志向していた私は、このことに違和感より好感を抱いた。

その後6月に入会后初めての先輩との個人山行で新幹事長に就任する小竹さん達に連れられ越後三山に登った。梅雨時であいにく天気は良くなかったが、豊富な残雪と変化に富む山々は極めて魅力的でとても満足な山行ができた。越後の山は東京から近く上野10時過ぎ発の夜行列車に乗ってよく出掛けた。行方さんとの一ノ倉の登攀や、思いの他時間を要し途中でビバークになったヒツゴー沢遡行等、他にも数々の思い出が残る。越後の山の大きな魅力は世界有数の豪雪地帯にあるため、森林限界が低く標高の割に多い残雪、険しくて雄大な山容、きれいな沢が多いことにあると思う。

入会から50年近く経つが山の会に入り山登りをして良かったと思うことは苦しく楽しい数々の思い出と登山を絆に多くの仲間を得たこと。今でも古い友人の大半が山の会や登山を縁に結ばれた人である。また、仲間に啓発され文学歴史、哲学にも興味を持つようになり知識や考え方の幅が広がった。そして、山で自炊をする習慣から料理が好きになり退職後も粗大ごみにならずにいる。

山の登り方も目指す方向も人それぞれであり、現役の人達には過去の山の会がどうこうとは関係なく、各々の嗜好にあった山登りを満喫してもらいたい。私はコーチ会担当というものの余り役に立てるとは思えないが、少しでもサポートできれば幸いである。

最後に私個人の目標は、まず本州中部の主要な山で唯一登り残した白山登頂。あと自分がリーダーとして夏合宿で挑戦した蝶ヶ岳から日本海に抜ける縦走の最後に断念した梅海新道を、この時新入部員として同行し先日訃報に接した丹藤君を偲び踏破したい。



## (1) 60 年前の谷川岳幽ノ澤中央壁左フェイス登攀-思い出

宮野準治 (S35 年卒)

「おお、いい奴が来た」。これは昭和 35 年 4 月私が入社した T 証券会社の本店に配属された新入社員が紹介されたとき、営業部係長だった慶応大学山岳部 OB の村上さん（1950 年代に慶応山岳部が極地法ルートとして選んだ槍ヶ岳から奥穂高岳積雪期縦走のメンバーのひとり）の言葉。それから彼との谷川岳参りが始まった。それまで谷川岳と言えば 2 月の西黒尾根からトマ・オキの耳や、5 月のマチガ沢ぐらいしか経験がなかった。



ただ、当時の谷川岳登攀はその事故の多さから一種の社会問題になっていたほどで、上田先輩（33 年卒）はお母さんから「訓央、どこに行くの？」と聞かれて「清水トンネルの上の山」と答えた逸話があるほど当時の谷川岳は危険な山（「魔の山」）と認識されていた。

当時（1960 年代）はまだ企業に週休 2 日制がなく土曜日は”半ドン“だったので、土曜日の午後から岩登りに行くとすると谷川岳が一番の選択肢だった。

まず、一ノ倉沢南稜ルートから入るのが谷川岳岩場入門（かなり手ごわい箇所がある）。1950～60 年代の岩登りは社会人山岳会（山学同志会、緑山岳会、第二次 RCC、昭和山岳会、東京雲稜会、グループ・ド・モレーヌ、ベルニナ山岳会、登歩渓流会、独標登高会などなど）が全盛のときで一ノ倉沢ルートは日曜日ともなれば順番待ちの状況。当然のことながら落石の危

険性が大きい。実際、我々が衝立岩烏帽子沢奥壁変形チムニーを四番目に登っていた時に弍番目のパーティのひとりの足元からの落石が参番目のパーティのトップの頭に当たり出血し、重症（当時はヘルメットなどなくよくて厚手の糸帽子）。すべてのパーティが下降した。

谷川岳には一ノ倉沢のほかに数箇所魅力的な岩場があるらしいということになり調べ始めた。その一つの候補が幽ノ沢だったがいかんせん具体的な資料がない。

「ミヤノ、幽ノ沢はどの程度のグレードか知っているか?」「ユウノ沢? それって谷川ですか?」といった程度の知識。そこで、手始めに村上さんが友人の紹介で古川純一氏（第2次RCC）から聞いてきた幽ノ沢中央壁左フェイスを登ることになる。

結果からいうと、中央壁左フェイスは一ノ倉沢の各ルートに勝るとも劣らない技術と体力を求められた。

ここで左フェイスに使用した装備について述べる。まず、①麻の30m（当時はこれのみ）ザイル1本（今はロープという）は亜麻仁油を擦り込む②ハーケン6本③カラビナ4コ（当時のものは安全環が付いていないし高価）④アブミ3台（今も使う? 令和元年6月上旬に残雪の涸沢に行ったときヒュッテに飾ってあった）⑤捨てなわ2本。

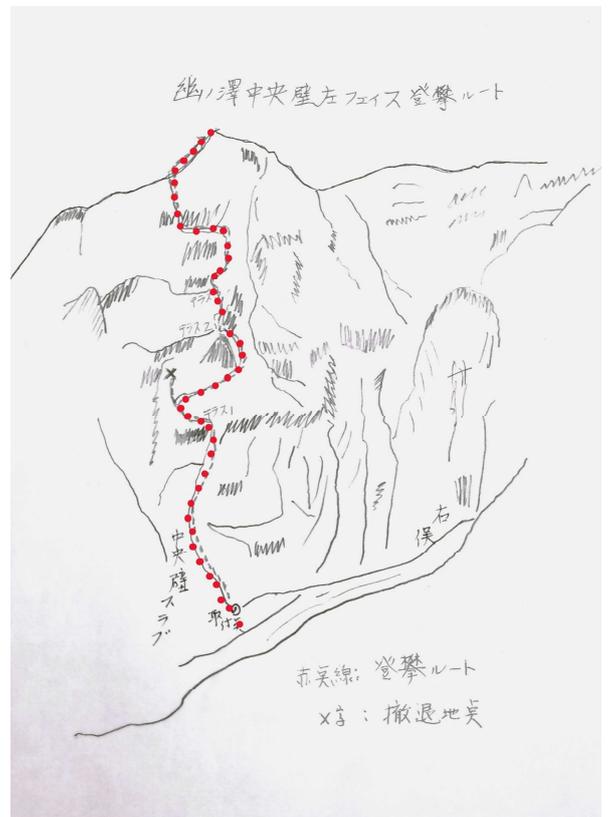
昭和37年7月23日(日)、幽ノ沢右俣から中央壁左フェイスに取りつく。最初の右俣スラブから左側の中央壁のスラブに出る。第一テラスからチムニー状のクラックを登る。このクラックは、最初は容易だが最後は極端に悪くなる。後で知ったのだがこの直登は無理。しかし、我々はがむしやりに直登を試みてにっちもさっちも動けなくなり敢え無く撤退。

8月6日(日)、再度の挑戦。最初の経験がありクラックの最後に至るルートを右にトラヴァースする。外傾のバンドに走るリスクがありハーケンがある。残置ハーケンはすべて確認が重

幽ノ沢中央壁の位置図



中央壁左ルートのルート図



要。アブミを使ってトラヴァースする。その上にハーケンが打ってあるので、それを利用して少し下る。右手のカンテにあるハーケンを確認するがグラグラしていて使えない。下に新たなものを打ち込みカンテをまわり込む。確保する村上さんは小さなスタンスに立っているだけなので一步一步に重圧感。これ以上の緊張感はない。この辺が左フェイスで一番緊張する箇所。

カンテをまわり込むとバンドがあり安心できるのだが、上の岩は逆層。そこに数本のハーケンが打ってあり一番しっかりしたものを利用する。ここで問題が起きた。岩は良くなるのだが、30m のザイルだと第二テラスに届かない。3m 位下のリスにハーケンを打って村上さんを確保するため一度そこまで下りる。第二テラスはしっかりしていて大休息する。ここまで3時間半を要した。しかし幸いなことに一ノ倉沢の各ルートと違い幽ノ沢のルートを登攀しているのは見る限り我々だけ。

幽ノ沢中央壁

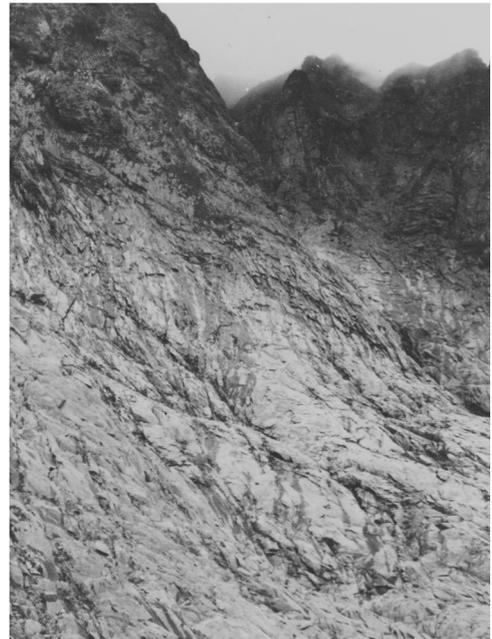
第二クラックが始まるが草付き。ここのクラックは腕力勝負。腕をクラック一杯に差し込み登るのだが時間が長くなると腕の力が落ちる。特に上部はスタンスをとるのに苦勞する。ザイルがいっぱい伸びたところに第三テラス。小さいが快適。ここからの第二クラックは傾斜した草付きが連続するので慎重に登る。滑りやすいし疲労感が増してくる。右上にややオーヴァーハングした岩がありその下をトラヴァースする。そのあとの草付きクラックは急傾斜。ハングは残置ハーケンに従いアブミ2台を使い強引に乗越す。

ここから緩いスラブが続くがフリクションを効かせて快適な登攀。スラブが終わる手前から左にトラヴァース。次いで傾斜の緩くなった壁だがアンサウンドが混じるので注意が必要。この壁が終わりに近づくとかなりの高度感があるリッジが待ち構えている。ややハングしているがホールドがしっかりしているため安心して登れる。ハング越えが終わると快適なリッジ。その傾斜が終わると大きなテラスで左フェイスの登攀は終了する。

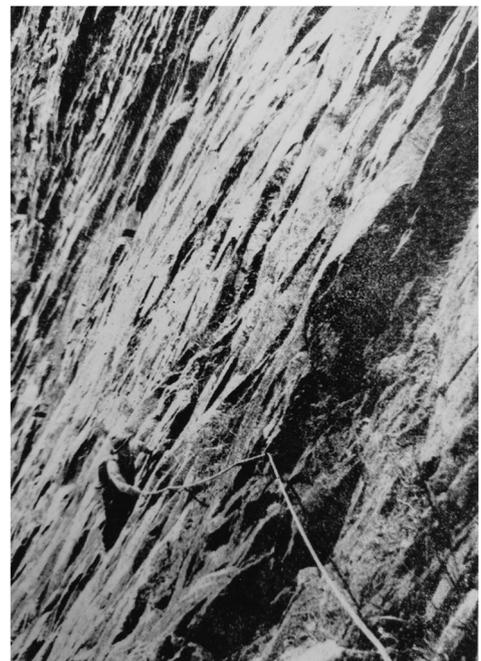
これが60年代の幽ノ沢中央壁左フェイスのロッククライミング。今の装備を使えばもっと楽に登れるかもしれない。幽ノ沢はこのルートのほかにも楽しいクライミングが満喫できるルートがある。特に一ノ倉沢の各ルートと比べ岩壁登攀がいい。ぜひ登ってもらいたい。

最後に谷川岳ズンドコ節です。

ㄱ 右に西黒 左にマチガ中の一筋西黒尾根を  
今日の凱歌に足取り軽く 駆けりゃ土合も  
はやマジカ ドコズンドコ ズンドコ ㄱ



中央壁左ルートに登攀



## (2) 谷川岳幽ノ沢支流での滝落下事故

打矢之威 (S37 年卒)

長男の和之が成蹊大学山岳部の OB なので、山岳部の有名な山小屋（虹芝寮）に泊まって周辺の山々を登った。

同部に伝わる「山の友に寄せて」という歌は、撒き割り、水汲み、小屋掃除で始まり、ダークダックスが歌っていたので、一般にも流布している。このときは長男と次男の勇二郎も同行していた。屈強なボッカが二人も付いていたので、安心して鼻歌交じり山行だった。

虹芝寮



馬蹄形の谷川連峰を半周して蓬峠から小屋に帰る途中、猛烈な暑さだったので、中腹の大滝の上で休息することにした。上半身裸になり、山靴を脱いで冷たい沢水に足を浸し、しばし夢心地でいたところ、急に長男が「親父行くぞ」と怒鳴ったので、ヤッと言って立ち上がった途端、岩苔の付いた大岩の上でバランスを崩して滑り、滝上部から裸のまま滝壺に落下した。ビルの3階くらいの高さで10mぐらいの落差だったと思う。数秒間だが、落下中「嗚呼、これで一巻の終わり。死ぬな」と観念した。

ところが滝壺が深く、ドボンと水中に落ちた。額と尾骶骨を水中の岩に強くぶつけたが、急激な水圧と落下重力との相殺効果のおかげか、幸いにも致命傷にならなかった。一瞬気を失ったが、上から息子たちが叫ぶ声が聞こえた。しかし苦痛で声は出なかった。水中にうつ伏せで浮かんだようである。

しばらくすると、和之がザイルを使って懸垂下降してきた。山岳部で培った技が役立った。「親父大丈夫か!？」と叫ぶ声は聞こえたが返事はできなかった。しばらくすると落ち着いてきたので「生きてるぞ」と声を振り絞った。



和之は私を背負い、上でザイルを確保している勇二郎に合図して、そろりそろりと滝上に辿り着いた。

打矢之威 OB



それからの小屋までの長いこと、身体の痛みと苦しみに喘ぎながらやっとの思いで小屋に転がり込んだ。

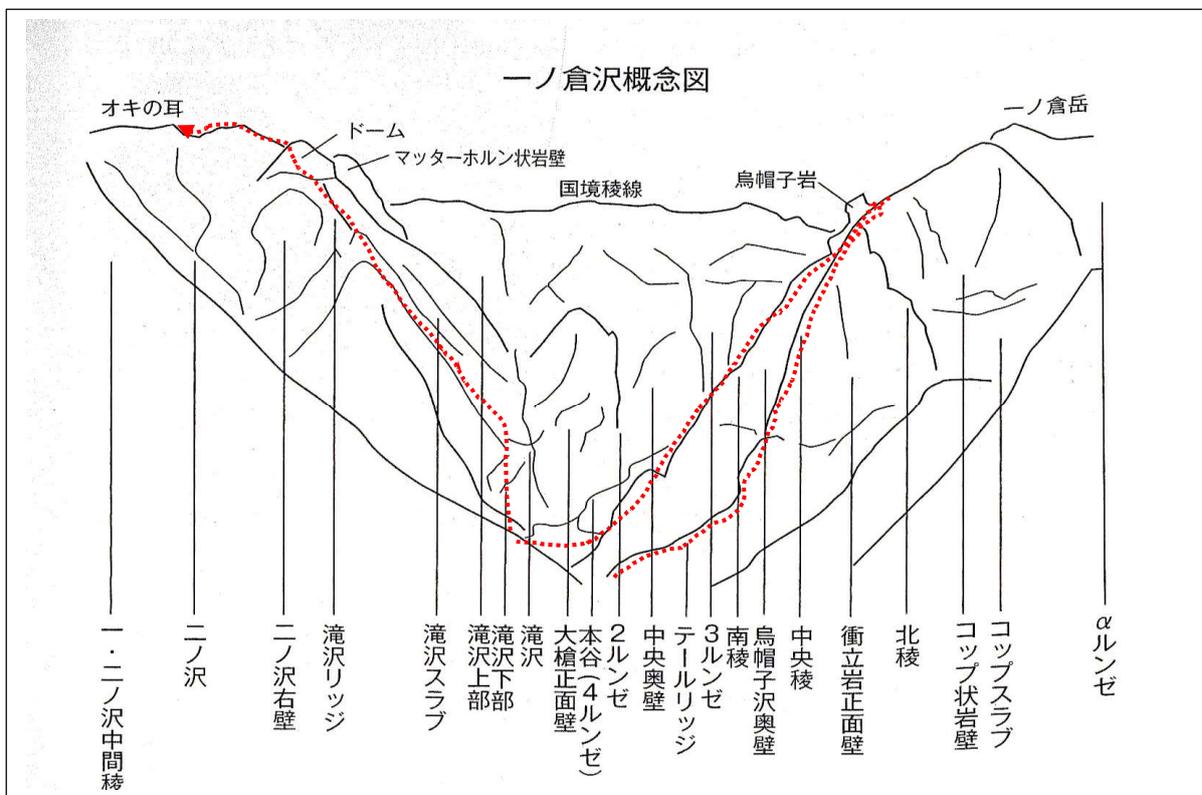
翌日、土合からの車で文京区音羽の東大医学部分院に入院した。主治医は山好きな人だったので、私の怪我の原因を聞くと治療そっちのけで山談議が始まり、楽しい病院生活となった。息子たちに助けられることは、終生これだけにしたいものだ。

### (3) 谷川岳ロングラン（一ノ倉沢の継続登攀）

行方正幸(S50年卒)

新緑の季節になると、ピッケルをハンマーに持ち替えて、岩登りがしたくて身体がウズウズしてくる。今回(1980年6月)はシャモニー針峰群やドロミテの大岩壁と同じスケールの岩壁に登ることを想定して、谷川岳で1000m以上の継続登攀をやろうと思った。

努力しても報われないのが世の常である。仕事で努力し、でもライバルが次々と地位と金と権力を手に入れても最後に人は腐敗する。人生なんてものは、夢は夢で終わるのが良いのかもしれない。登山も同じだ。本場のアルプスの登攀は夢で終わった。報われなくても日本の山で挑戦する、それはそれで私の美しい山の人生だったような気がする。



大学を卒業後、私は5月の谷川岳の登山規制解除から7月下旬までの2ヶ月間、週末は谷川岳に岩登りに行くのが恒例だった。今回の谷川岳の1000mの継続登攀となると、どのルートから一ノ倉沢滝沢下部～3スラ～ドーム（5級：800m：V・A1～2）に繋げて登るのが問題だ。衝立岩、鳥帽子岩、それともコップにするかいろいろと考える。南稜と中央稜は週末にクライマーが集中するので論外。衝立とコップは人工登攀ルートなので先行者がいると時間切れになる。それなら鳥帽子奥壁で最も人気(ひとけ)のない凹状壁ルー



ト（4級：300m：V）から継続しよう。全長 1000m以上、32 ピッチのロングランになる。けれど問題があった。問題っていうのはいつも同じで、一緒に登ってくれる相手がいないのだ。それでもやっと大学後輩の高野啓介の都合が合ったので、土曜の夜の上野発の最終列車に飛び乗った。

一ノ倉沢の出合で休息も取らずに、我々は白く冷気が沸きあがる雪渓を駆け登った。陽は昇り、巨大な半円状のルンゼの所々に細い滝を懸けて威圧的聳にえている。この時期はテールリッジまで豊富な雪渓があるのでアプローチは楽ちんなのだ。テールリッジには既に獲物に群がるアリのようにクライマーたちが取りついている。初心者がザイルを出すのでいつも混雑していて時間がかかるのだ。それで我々は、彼らの嫉妬と敵意の混じった冷たい視線を浴びながらノーザイルで横からスイスイ追い抜いて烏帽子奥壁に取り付いた。装備はザイル 9 mm×40m×2本、靴：ガリビエール、ハーネス：ウィランス：カラビナ×12、マイクロナッツ×3、クロモリハーケン×5、シュリング×10、テープアブミ×2と軽量化に努めた。

まだ午前7時だ。先は長いが時間は十分にある。見上げると凹状壁が日陰になり陰鬱に覆いかぶさってくる。でも濡れていないのが嬉しい。取り付きは中央カンテと同じなので先行されないように直ぐに登り始める。学生時代に一度登っているので何んの迷いもない。はじめの3ピッチは緩いフェースで残置ハーケンは殆どない。時々小石が上から落ちて来るのがいやらしい。このルートの核心部のV級の膨らんだ印象的なフェースは、こっちから誘ったこともあり私がリードする。垂直だが指先の第一関節にかかるカチカチのホールドがあるので、ランナウトしても四谷見附の石垣で鍛えているのであまり恐怖感はなかった。V級のピッチを登り切ったところでクロモリのナイフブレードを打ち込むとキーンキーンと心地よい音がした。ナイフブレードはヨセミテ用の薄刃のハーケンだけれど一ノ倉沢でも良く効いた。そこからは傾斜が緩くなるのでツルベでドンドンと登ると二時間弱で終了点についた。その後の烏帽子岩の岩稜を20分ほど登り、烏帽子の頭を越えて、左側から来る踏み後を石を落とさないように5～60mクライムダウンするとクライマーが数人がたむろしている。南稜の終了点である。もちろん、上から降りて来る奴なんか良い顔なんかされないから、そそくさと6ルンゼ右俣の暗いルンゼの中にザイルを投げて5～6回懸垂下降をすると本谷バンドに着いた。

滝沢第3スラブ



ここは一ノ倉の本谷、第3ルンゼ、中央壁、第2ルンゼと一ノ倉沢の岩壁に囲まれた「へそ」のような場所で、身の毛が余立つほど壮絶な光景だ。眼前の青白い垂壁には滝沢の水流がキラキラとダイヤモンドのような雫となって空中を舞っている。いつまでも見ていたいけど、本谷バンドは一ノ倉中の落石が集中する怖い場所。急いで、登攀具を身に付けて滝沢下部ダイレクトルートを人工登攀で登る。滝沢スラブのスタート地点となる広河原に着いたのが昼前だ

った。滝沢本流には水が流れていて、ここで少し休憩を取る。昼飯はもちろん山崎のアンパンである。時々滝沢に大きな落石があってヒヤッとする。



12時に谷川岳最長・最難の第3スラブに取り付く。この時期の滝沢スラブの上部には雪のブロックが残っていてスラブが乾いていることは少ない。残置ハーケンは確保点以外にはないので慎重に行く。核心部のF6の基部は左側がオーバーハングに抑えられて暗く、おまけに濡れていて気分の良い場所だ。先輩なので「高野、お前が先に行けよ」とは言えないので、覚悟してヌルヌルのV級のピッチをリードする。左側のハングに沿って10mほど登ってから右にトラバースし、膨らんだヌルヌルフェースにアブミをひとつ残して乗り越すと乾いたスラブに出て、やっとホッとす。いやらしいけど思ったほど難しくはなかったな。陽の当たるスラブの中央部をグングンとザイルを伸ばし、100m程登ってから右側のリッジの切れ込みに出る。ところが滝沢スラブが本領を發揮

するというか、凶悪な本性を現すのがここからドームの基部テラスまでの200mの垂直の草付き登攀だった。難しさはⅢ～Ⅳ級なのだが、ホールドは泥の穴かブッシュの根っこ、スタンスは露岩に粘り着いたブカブカの草付きとドロドロの凹みで、ハーケンは皆無。2～3本のブッシュをシュリングで束ねてプロテクションにする。「もしトップがリッジの右側で落ちたらビレイヤーは反対の左側に飛び込んで止めるしか無いなあ」「早くドロドロから抜け出したいなあ」と、そんなことばかりを考えながら疲労と暑さで朦朧としながら登ると、陽が傾いたころドームのテラスに着いた。後は3ピッチの人工登攀と優しいフリーで国境稜線に飛び出し、一ノ倉沢の11時間、32ピッチ（懸垂下降も含めると38ピッチ）、1000mのロングランは完了した。

陽の沈みはじめたトマの耳には残雪の脇にウスユキソウなどの高山植物が咲き始め、夏がそこまで来ていた。もう天神平のロープウェイの最終便にも間に合わない。西黒尾根を夕闇に追われる様にふらふらと歩いて、懺悔岩からマチガ沢側の巖剛新道を降りる頃、スッカリと暗闇に包まれていた。もう本場アルプスの登攀のことなど全く頭になく「酷い草付きだったなあ」「もう登りたくないね」とブツブツ話しながらヘッドライトの灯をたよりに寝ぼけながら降りて行くと、暗闇の中でバサッバサッというような音がした。

山の異様な気配に驚いて身体中に鳥肌がたった。訳の分からない恐怖心に包まれていた。恐怖心が高野にも伝染したのか二人ともスッカリ無口になって暗闇を駆け出して、湯檜曾川の車道に出ると道路が曲がる都度、以前須田先輩が話しをしていた遭難者の亡霊に出くわすんじゃないかとビクビクし、土合登山指導センターに点る灯を見て、生きて帰れたと安堵した。

もうこの日に東京に帰る汽車はないはずだが、土合に泊まったのか、夜行列車で東京に帰ったのか、疲れすぎていて、いまでも記憶に無い。

### (3) 谷川岳万太郎谷遡行記

- ① 日程：2018年8月  
 ② 山域：谷川岳万太郎谷  
 ③ メンバー：真藤幸輝(当時M1) 井上直斗(4年)、  
 柳田野衣(2年)、齋藤拓海(2年)  
 ④ 概要：

2018年8月、なんとか期末試験を終えて夏休みを迎えた私は、高崎線と上越線を乗り継ぎ、清水トンネルを抜けて最初の駅である土樽駅に降りた。久々の山行となった今回の万太郎谷本谷の遡行は、初めて泊りがけで行う沢登りであり、緊張感を持ちながらも高揚した気分でした。

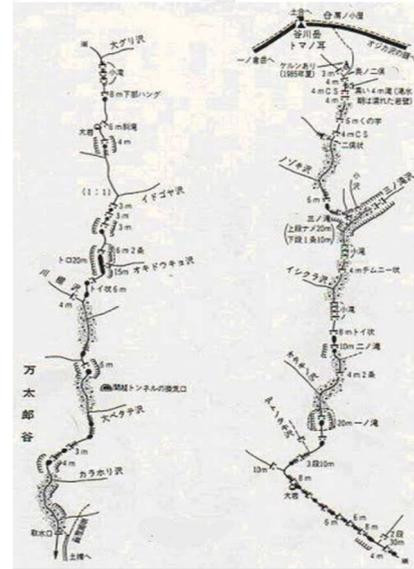
人の気配がない駅から林道をしばらく進み、その途中で入渓地点に到着した。天気は快晴に恵まれ、爽快な気分でもうまだ広い河原を進んでいくと、立派な堰を通過したあたりから、徐々に沢らしい気分になってくる。遡行の序盤は白っぽい岩のなめ床が広がり、開いた木々の間から仰ぐ青空と相まって明るい美溪に魅了された。その岩床では岩の溝を見つけてはウオータースライダーのように尻から滑って何度も遊んだ。

早くも全身を濡らして楽しんだ後、最初の滝となる高さ4メートル程の魚止メ滝は左側の壁をへつりて突破すると、次第に大きな岩がゴロゴロと点在してくる。しばらく進むと突如として巨大な人工物が現れた。後日調べたところ関越自動車道のトンネルの換気塔であるようだ。山中の深い谷にたたずむ塔の姿は異様であった。その後入り込んだゴルジュ帯では泳いで突破しようと試みるが、水流に押し戻されてしまう。大型ザックの浮力も泳ぎの妨げになってしまうが、なんとか岸の移動を経て登ることが出来た。

その後も泳いで取りつくような滝をいくつか通過すると、いよいよ高さ30メートルの一の滝にたどり着いた。滝に近づくと聳え立つ岩壁の迫力に思わず口が開いてしまう。直登することも可能なようだが、ぬめりもあって難しいと判断し、高巻きを選択する。やや引き返して、右側の斜面を登るが、結果として非常に困難な高巻きとなった。登るにつれて傾斜が増す一方で、ホールドが減る状況に苦慮した。すでに精一杯の登攀になっていた私は、真藤

齋藤 拓海 (R2年卒)

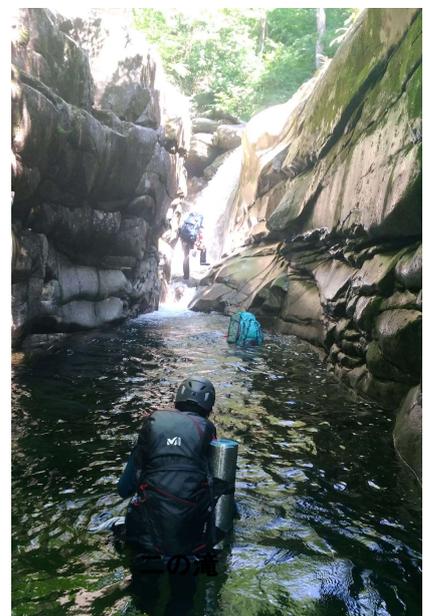
万太郎谷遡行図



白い岩のなめ床



ゴルジュ帯



先輩の高さまで登ったところで灌木に取りつき、上流の方向へトラバースするが、今度は滝の上部がなかなか見えない。どうやら高く登り過ぎてしまったようだ。

ここでロープを出して数度の下降をして、なんとか滝の落口に付近までやってきたが、ここで2時間程要した為に日も落ちてきてしまった。休む間もなく行動を再開して、二の滝では右側の踏み跡を登り、ようやくピバーク地点に到着した。

翌日は出発から程なくして2段40メートルの三の滝にたどり着く。この登攀で井上先輩がリードで滝の右側から登っていく。軽快なムーブで滝の上段も右側から登って支点を設置すると、荷物を回収して登り返しでは左側のルートから滝の水を浴びながら登っていく。この時の我々は滝の突破に夢中で、先輩が滝を登る雄姿も、滝の全景も写真に収めるのを忘れてしまったことに悔やまれる。

三の滝を越えると徐々に水流は細くなっていき、沢の上部まで進んできたことを実感する。清流との別れを惜しむように水流れに浸かりながら進むと、いよいよ沢が枯れて稜線への長い詰めに取りかかる。このとき谷は霧がかかっている、視界の悪い中を藪漕しながら登っていった。沢靴を履いたまま滑りやすい岩の上を歩くことに難儀しながらも、谷川岳主脈の稜線が近づくにつれて足取りは軽くなっていく。その笹藪を肩の小屋付近まで詰め上げてついに遡行の終了だ。

今回の沢登りが私の初めての谷川岳登山にもなったのだが、メジャーな天神尾根や西黒尾根から登るのではなく、その反対側からパーティーで力を合わせて遡行したことが忘れられない経験となった。

実際、谷川岳を訪れるたびに山頂から万太郎谷の方面を眺め、その長い谷を歩いたことをしみじみと思い返すのである。



万太郎谷の長い詰め



左から 斎藤、真藤、柳田、井上



## (4) 秋の谷川岳 山行記

小野 丈(WMS3年)

谷川岳と越後の山々の特集ということで、昨年 10 月中旬に単独で谷川岳に登った際の報告を致します。

- ① 日 時:2021年10月18日(月)
- ②メンバー:小野 丈(当時2年)単独
- ③行 程:天神平(09:15)…肩の小屋(11:00)…トマの耳(11:20)  
…オキの耳(11:40)…肩の小屋(12:20)…天神平(13:40)
- ④概 要:



4時台の始発に乗って土合駅へ。土合駅の訪問は4年ぶり2回目なのだが、以前はなかったはずのカフェやグランピング施設などがいつの間にか併設されていた。

土合駅の450段余りの階段を上り、車道を登っていき土合口駅へ。今回は初めての山城であったということと公共交通機関日帰りという制約上、ロープウェイを利用して天神平まで移動した。今年も谷川岳には訪れる予定であるが、その際は、西黒尾根経由で登ってみようと思う。当日がうっすら初冠雪だったということもあり、平日にもかかわらず多くの登山客で賑わっていた。天神平はよく晴れており尾瀬の山々も遠望できた。

はじめは紅葉と雪の中を進んでいく。とは言っても、登山道の雪は踏まれてほぼ無くなっていた。途中の岩場は雪が溶けて滑ったので慎重に通過した。肩の小屋から見える谷川岳主脈線は絶品だ。仙の倉山、平標山までいつか歩いてみたいものだ。余談だが、谷川岳主脈線は奥に続く稜線で、最初に見えるピークから左に続いている鋭利な稜線上にある双耳峰(俎嶺)が昔は谷川岳であったようだが、国土地理院の地図の誤表記によって変わったという。濃い藪で覆われて登山道が無かったが、最近藪が刈られ道ができ始めたみたいなので、機会があれば行ってみたい。

肩の小屋をすぎると谷川岳の山頂は近い。トマの耳とオキの耳の名前の区別が付かなくなってしまうことがしばしばあったが、調べてみると一説によるとトマは手前、オキは奥から来ていると言われていたらしく、これなら覚えられそうだ。トマの耳からオキの耳の間は道が狭くすれ違いが多く進みづらかったが、なんとかオキの耳へ到着。途中の鞍部からトマの耳を振り返ると、トマの耳の上にいる大勢の登山者と東側に切れ落ちた斜面を望むことができた。

オキの耳で軽く昼食を取ったのち、同じ道を下山した。

帰りは雪解けで道がドロドロだった。バスに乗って湯檜曾の温泉街に移動し日帰り湯に浸かり、湯檜曾駅から普通電車で帰った。

新潟の長さは結構なもので、親不知から鼠ヶ関周辺までの距離は東京から名古屋までの距離と同程度であるらしい。その間には飯豊連峰、尾瀬の山々、越後三山、谷川連峰、妙高戸隠連山といった名峰が連なっている。

未熟者で越後の山の中では谷川岳しか登ったことがないが、今年の3月に会津若松に個人的な旅行で訪れた際に鶴ヶ城の天守閣展望台から望んだ、周りの雪山とは毛色が異なる真っ白な飯豊連峰には気圧された。きっと他の山々もこのような名峰揃いなのであろう。訪れるときが楽しみだ。

土合駅



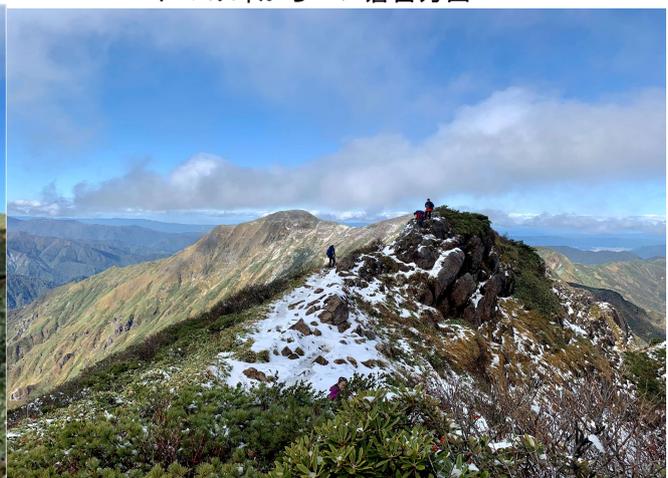
天神平のロープウェイ



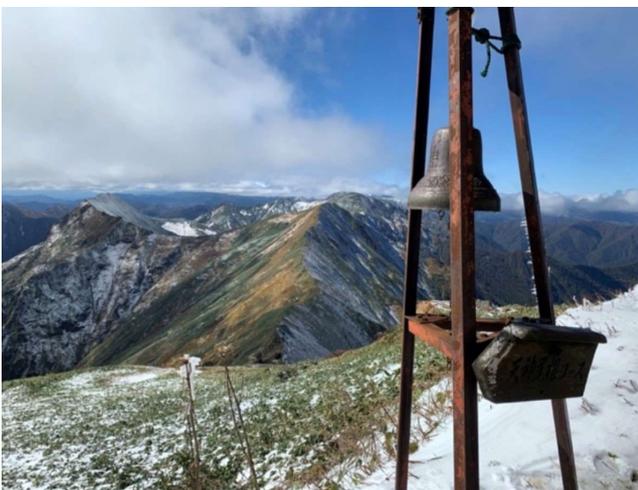
天狗のとまり場から望む岨嶺



トマの耳から一ノ倉岳方面



肩の小屋からの主脈と岨嶺



両耳間の鞍部からトマの耳を望む



## 【COLUMN 1】

## 治療される側から観たピンコロ人生 進健康管理法(最終回)

廣瀬舜一 (S38 年卒)

## D 薬やお医者さんに頼り過ぎず、先人の知恵を使い、頭と体で健康基盤を創り込む。



1. 歯を大切に(食べ物を取り込む入口は大切)  
歯磨きは夜1回のみ。金属の歯セラミックに切り替えた。  
まだ24本中20本残っている。
2. 食事コントロール(とにかく食べ過ぎないことが健康の大前提)
  - ① タバコは禁煙、酒は百薬の長；ビールは250ccまで、日本酒・葡萄酒コップ1/2、缶ジュースは飲まない、コーヒーはブラック、日本茶は一日3杯
  - ② 分解しにくいもの、体内に残り易いものは食べない。カラリと揚る天ぷら油、ポテトチップ類、ファーストフードの油は体内で分解しにくいトランス油
  - ③ よく噛んで、時間を掛けて食べると食べ過ぎない。食事は伝統的の日本料理+時々肉と牛乳。油が中心の西洋料理は控える。
3. 活性酸素を除去する。
  - ① 水素プロで細胞酸化ストレスを除く。コエンザイムQ10のサプリを飲む。
  - ② 脳内核酸のサプリでボケ防止、読み書き、算盤で認知症を防止する。
  - ③ 毛細血管は第2の心臓。動脈→静脈の結接点を鍛える=乾布摩擦、温冷浴等
  - ④ 月に1回は暴飲暴食をする。月に1回はストレス解消のため肉体を極限まで使い、生命力を覚醒する。
4. こまめに身を動かす習慣を身につける。
  - ① 面倒くさがらずに外に出てどんどん歩く。家事手伝いや後片付けをする
  - ② 階段は2段上りで、「階段に出会うと、心ウキウキうれしくなる！」
  - ③ 朝日を浴びて、深呼吸で体内隅々まで
  - ④ 頭脳の疲労には酸素ボンベを活用。登山用の酸素の吸引で頭スッキリ
  - ⑤ 起きる前のスクワットで肩甲骨を動かすと5分で身体が温まる。

## E. 私の実践的健康生活の虎の巻=その考えと実践

1. 自分の身体は自分で治す。
  - ① 人間の身体に備わっている自然の治癒力を引き出す。
  - ② 免疫力を高めるために、命あるものを食べる
  - ③ 身体を甘やかせず、こまめに動く習慣を身に付ける。
2. 75歳過ぎの健康体は生きた芸術品だ。
  - ① ピンコロ(健康寿命=本来の寿命)を目指して心身ともに豊かな人生を
  - ② 血管の健康管理；コレステロールに注意して身体の錆を落とす。
  - ③ 骨と筋肉は鍛えられるが心臓は鍛えられない。心臓寿命=本来の寿命

3. お医者さんと薬に抱きつかない。お医者さんは産婆役  
自分の力で、生命力、免疫力、自然治癒力を鍛え、自立神経を整える。
4. 現代医学が見過ごしている部分があることに注目  
感染症、手術、急性の病気等に薬の使用と開発は現代医学では不可欠、しかし、
  - ① 患部のみに集中して全体を見ていない。症状のみに注目
  - ② 対処療法中心で病気そのものを治していないことに注目
  - ③ 病気になった原因には無関心なことに注目
5. 東洋医学(漢方)の基本的な考え方  
「気・血・水」の循環を基本に考える。気は命のエネルギーの巡り、血は栄養や酸素を、血の巡り、水は身体の潤い、水(体液)の巡り。  
この3本柱がバランスが保たれていることで健康という。3本柱のバランスが崩れると病気になる。若しくは運動不足、過食、疲労、自立神経の乱れ等で全体のバランスが崩れると身体の弱い部分にストレスが集中して病気になる。
6. 生活習慣の悪い点、偏った部分は気が付いたら改める。
  - ① 過食過飲を改め、ゆっくり食べる、飲み過ぎない。二次会はトマトジュース
  - ② 運動不足や身体側面の筋肉の衰えで背骨に負担がかかり腰痛、ひざ痛になる。
    - ㊦腰痛、ひざ痛に備えスクワットで足腰の筋肉を鍛える。
    - ㊧一日30分以上、速足(時速5km)のインターバル走法で歩く。
    - ㊨階段2段上がりで腰を支える筋肉を強くする。
  - ③ 間食・夜食は取らない。空腹が最高の薬。空腹が臓器を休め、体調が整う。
  - ④ 仕事や趣味への過度の集中でストレスをため込まない。  
長時間同じ姿勢は血流を悪くする＝エコノミー症候群→こまめに動く。
7. 寿命は天のみぞ知る。ピンコロを目標に健康年齢(寿命)を伸ばす。
  - ① 健康年齢を寿命に限りなく近づけ、人生を自分の意志で謳歌する。
  - ② 現代人は情報洪水の中で暮らし、自律神経を刺激しすぎて体調を乱している。  
→ゆったりした、癒しの時間が必要
  - ③ 緑や自然と親しんで自然のゆらぎ(気付きと森林の生命の気)をもらう。  
近代文明が作り出した人工物に囲まれ、その刺激で疲れた心身を整える。
8. 健康習慣を身に付けるコツ

三日坊主でOK、しかしやることを、止めてしまわないこと。

365日、毎日とは続かないのが人情、休むときは休む。

たまには(週一、月一)程度は暴飲暴食をして、息抜きをする。登山の要領で

## F. 参考にした健康書籍のおすすめは

脳梗塞、心筋梗塞、高血圧は油が原因 脳梗塞は予知できる 幻冬社 真島康雄

※ ご好評いただいた廣瀬舜一OB(S38年卒)の「ピンコロ人生 奮進健康管理法」連載はこれで終了いたします。

## 【COLUMN 2】

## 日本岳人列伝その4：田部重治

金子治雄 (S41年卒)

主な著作、岩波文庫「新編 山と溪谷」（旧日本アルプスと秩父巡礼）



振り返ってみると田部重治の「日本アルプスと秩父巡礼」は、高校生になって私が出会った初めての本らしい本だった気がします。この本を繰り返し読んで山への憧れを掻き立て、そこから大島亮吉にアルピニズムを学び、尾崎喜八に山の詩的世界を学びました。

私の高校時代は戦前から続く旧制高校の教養主義が残る最後の時代でした。先生も旧制浦和中学から継続している方も多く、一部の知的に早熟なクラスメイトたちは、阿部次郎とか倉田百三などを読んで、夜明かしながら議論をする機会が度々ありました。中学時代から映画に凝り小説などを読む習慣が全く無かった私は、彼らの話がさっぱり理解できず、読書に挑戦したものの直ぐ投げ出してしまいました。

そんな折、目の前に山が現れ、ようやく読書の対象が見つかった嬉しさもあり、手当たり次第に山の本を読み始めましたが、その中で出会った書物がこの「日本アルプスと秩父巡礼」でした。田部の文章は平易で、読み進む内に知らず知らずに、まだ見ぬ深くて広い山の世界に私を引き込んで行きました。

50代に薔薇とガーデニングにはまりましたが、その歴史を調べる内に、驚いた事にガーデニングがアルピニズムと双子の関係にあったことが分かりました。古来西欧では自然とは森羅万象を意味していましたが、近代に入り物事を客観的に捉える自然科学が発展した結果、自然の概念は緑の景観に縮小され、風景を美の視点で捉えるピクチャレスク（絵になる空間）が研究されました。更に景観の美学は英国ロマン派の文学やターナを初め絵画の分野に劇的な変化をもたらしたことも知りませんでした。

60代に登山を再開し、若い頃に読んだ岳人たちの著作を改めて読み進む内、初期の登山史を形成した岳人たちは、近代的自我意識をベースに人と自然との関係を模索し、その在り方を近代風景論の美学の潮流の中で使命感を持って活動していたことに気が付きました。

近年カーボン・ニュートラルの数値が国家の目標設定までになり、世界史の区分もカーボン排出の観点から、産業革命が主要なファクターとなっています。その産業革命時、大英帝国に2人の思想家が登場しました。1人はドイツ人マルクスで、もう1人はラスキンでした。マルクスは資本と労働を、ラスキンは芸術と創作の観点から産業社会に対して警鐘を鳴らしました。当時の英国知識人たちはラスキンの近代画家論をこぞって座右の書にしましたが、余りに難解故に多分その解説書だけが読まれていたと想います。ラスキンの名はやがて忘れ去られましたが、彼の問題提起は、その後静かに建築、工芸、文学、絵画、自然景観論など幅広く及び、フランス印象派もその流れで誕生しました。更にアルプスを風景の崇高美の存在とした山岳論は、アルピニズムの勃興をもたらしました。後世カーボン・ニュートラルが歴史として語られる時代になった際は、産業革命後ラスキンの影響を受けて始まった登山史も近代文明史の重要な位置づけになるかも知れません。

風景の視覚について少し触れますが、西欧において風景は、近代になって初めて一般に認知された現象だったことについて、セザンヌは有名な言葉を残しています。彼は生涯に80点以上故郷のサント・ヴィクトワール山を描きました。セザンヌは山麓の農民たちが、「彼らは本当にサント・

ヴィクトワール山を見たことがあるかどうか疑わしい」と述べ、「彼らは確かに山を見ていたが風景としての視点で見えていない」と言っています。人は生まれた時から、全てを知覚するのではなく学習によって蓄積します。サント・ヴィクトワール山を美しい風景と感じる視点はセザンヌの絵を見て学ぶのです。

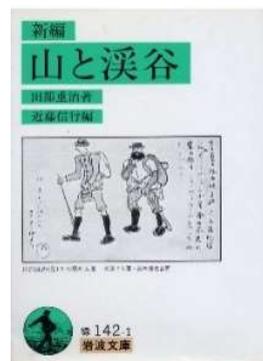
我が国は多彩、変幻極まりない特異な風土の中、万葉古今の時代から花鳥風月に親しみ、和歌や俳句によって自然に対する知覚は共有されてきました。更に中国から自然の精神的な理想郷を描いた山水画が導入され、風景や庭園は山水画の視点で眺められました。一方平野の際に立つ山は稲作における水源地で水神の聖地であり、やがて修験道場に変わり遥拝の対象となりました。西欧と異なって我が国において山や野の自然は、山川草木悉皆成仏の天台思想のごとく、人と不可分の関係でした。

田部重治を解説する場合、従来の登山史においては彼の山岳活動のみが論じられており、彼が英国ロマン派詩人ワーズワースの研究者で、西欧近代の風景の美学を体系的に研究した最初の日本人であり、同時に彼が幼少の頃から富山平野の豊かな農村文化の中で培った山川草木と一体の原風景を持ち、深山溪谷の山岳美と西欧の自然観との融合を、生涯かけて試みた点については全く触れられていません。私は「日本アルプスと秩父巡礼」の巡礼の意味は小暮理太郎と共に西欧と日本の自然観との融合を目指す、長い道のりを表現したものだと想っています。

田部は東京帝大文学部英文科を出て法政や東洋、そして東京女子大で教鞭をとりながら生涯山に向かいました。彼はまた別な著作で、山に対する心を語っています。「多くの登山者は詩を作らないにしても、最も詩人的な生活を、ある瞬間において体験していることは確かである。中略、我々が山岳に対して抱くものは、哲人的かつ詩人的感情である。登山者は自らの登山的行為の認識をそこまで高める必要があり、また高めないではいられない。登山は体力を行使し、それによって精神を動かし我々に大きな体験を与えるものである。単に登山の外形のみ語り登山の方法のみ論じることは全てでなく、登山はもっと大きな使命と可能性を持つことを忘れてはならない。登山の極致は詩人として哲人として生活を行為することである。」と述べています。大島亮吉が好みそうな言葉です。

高校時代、知的なクラスメイトたちが読んでいた文学書や哲学書に全く歯が立たなかった私が、「日本アルプスと秩父巡礼」を何回も熟読したのは、紀行の状況描写が解り易かっただけでなく、紀行を流れるトーンが薄っぺらでなく、紀行の中で語る感慨も、本来は哲学的になりそうな心理描写でも、詩的直感力で平易な言葉で表現してくれたからでした。改めて「日本アルプスと秩父巡礼」を考えてみると、この著作は私にとって単なる山岳紀行でなく、阿部次郎や倉田百三と同じ文学書や哲学書だったと思います。

次回、第5回、小暮理太郎です。





## 私の山登りと海外体験記

—人生記録—

打矢之威OB(S37年卒)

1月に打矢之威OB(S37年卒)から一冊の本が届きました。「私の山登りと海外体験記—人生記録—」打矢さんの半生を綴った自費出版で、余りに面白くて、アツと言う間に読破してしまいました。

打矢さんは5人兄弟の4男で自由奔放に育てられ、本人いわく「学生時代(独協学園高校、早稲田大学)は山登りに熱中し、教室にいるより山小屋やテントで寝ることが多く、『お前は商学部ではなく山岳部で入学だ』と兄たちの輦轡をかっていました。従って成績は最低、1962年に貿易商社に入ったのはひたすら外国に行きたかったのが理由です」とあります。

打矢青年はめでたく1967年にアフリカ、中近東要員としてレバノンのベイルートへ赴任し、中東13ヶ国を飛び回っていました。1970年6月には過激派のPFLPの人質になって脱出したり、右翼の大物田中清玄氏とバーレーン皇太子の結婚式に出席したり、広島大手観光会社の社長と新ホテルのこけら落としイベントのベリーダンサーを中東各国で探し回るなど波乱万丈の商社マン時代を過ごしたそうです。

商社を1981年に退社して、自分で貿易会社を作ってからは現在まで日本と米国ポートランドを行き来する生活を送っています。その間、数度のヒマラヤトレッキング、サンチャゴコンポステラ、ルルド巡礼、オーストリア・アルプストレッキング、オレゴン州フッド山登頂。ワシントン州レーニア山トレッキングなど仕事と趣味の登山の両輪で大活躍、本当に打矢さんの旺盛な行動力と、ご家族、特に奥様の懐のおおきさには脱帽の自叙伝です。

この本を読みたい方は打矢OB又は行方正幸宛てにご連絡ください。

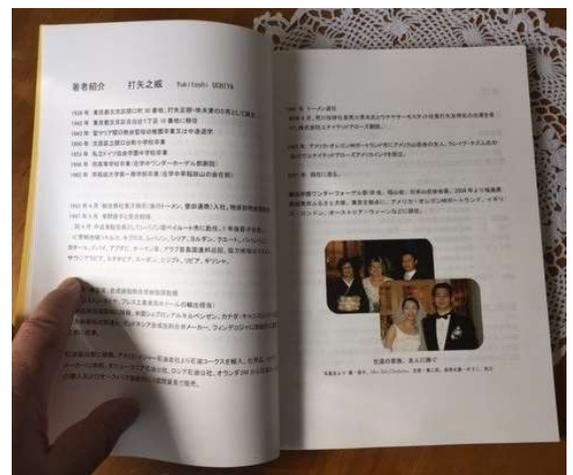
打矢之威 [yukitoshi.uchiya@gmail.com](mailto:yukitoshi.uchiya@gmail.com)

行方正幸 [yukuemnamaekata@gmail.com](mailto:yukuemnamaekata@gmail.com)

(文責：行方正幸)

(注記) 内容の一部が稲門山の会HP→OB会トップ→会員の海外山行でアップ(笠原OB記S40卒)

- (注1) サンチャゴデコンポステラ巡礼の旅
- (注2) アラスカ(デナリ～氷瀑)の旅
- (注3) ヒマラヤプーンヒルトレッキング
- (注4) ブータン紀行
- (注5) オーストリア・アルプス紀行



## ネパールの山岳案内人シェルパ族の窮状

打矢之威 OB (S37 年卒)



若い頃から、私はスポーツ的ピークハンティングやバリエーション登山に熱中してきたが、歳を撮ると登山に精神的な意義を感じるようになった。(中略)

ご縁があり兄がカトマンズの旅行会社を営んでいるラジブ氏と親交を重ねていたこともあり、大学時代の山仲間と2回にわたりブータンとネパールを訪問した。

今から8年前の2014年4月、まずアンナプルナトレッキングに行った。80歳に届かぬ後期高齢者の年代で、未開発地訪問は魅力的であった。

現地の案内人とボッカは、HOSHI TREK というシェルパの組合会社で親分(社長)はパダム・チャムリンという50歳台の中年男性である。部下の“ジャパン”とか“ビル”とか源氏名の若者が我々のキャンプ用具や食料を担いで一行の前後に従った。バカでかい荷物を背負うが平均40kg、70kgくらい担ぐという。大学時代の合宿で30kgのキスリングを背負わされてバテバテになったのを思い出して感心した。彼らは重量で賃金が支払われるとのことで、生活がかかっている。

ある夜パダムの家に招待されたが、何人家族がいるのかわからない。狭く暗く食堂にゴチャゴチャ大勢いた。彼らを養うのは大変だなと感じた。

1回目のブータン訪問の後、アンナプルナトレッキングを楽しんだが、ラジブ氏にカトマンズの世界遺産地域にある神社仏閣、王宮やパルダール広場の名所、或いは死者を茶毘にしている川向の火葬場所なども案内してもらった。我々の居る川筋の古い寺院には今にもあの世に行く風勢の老人僧が何人も座禅を組んでおり、狭い対岸では薪を積んで白衣に包まれた遺体を何体も火葬していて、いやな匂いが漂っていた。正に現世と後世が向かい合っている場所だった。

さて、我々が帰国した10日後にネパールで大地震が発生した。ヒマラヤトレッキングの中の外国人登山者が雪崩や岩崩に巻き込まれて多数遭難した。10日遅れていたら我々も遭難したかもしれない。発展途上の国なので民衆は大変な苦勞を味わっているなど想像していたが、翌年11月にエベレストトレッキングの計画があり、その前の9月にアラスカのマッキンレートレッキングに行った後で帯状疱疹も発生していたので迷ったが結局行くことにした。

大地震の崩れた痕跡はあちらこちらに見られて、崩れた民家、寺院、世界遺産の由緒ある建物も修理できず応急措置をしていたり、そのまま放置されていた。庶民の生活は困窮しており、ガソリン不足や物資不足でストライキ頻発、ルクラに飛ぶコミューターも間引き運転だっ

た。しかし、外国人旅行者は徐々に増えてきて、パダム達は本来のボッカ業に支障は出ていないように見受けられた。この時の山行の最終目的地はコンデという 5000m の山だったが、私はナムチェで沈滞、体調が戻ったので、エベレストとローツェやアマダブラムを遠望する場所まで単独行動するだけ。まずはルクラから海拔 4000m のナムチェバザール村(エベレスト登山の出発地でシェルパの里)まで山村部を縫って深い谷を降りたり、峡谷にかかった不安定な吊橋を渡り、標高差 800m もある急峻な石畳の坂道を 1 日中歩いたりの長丁場のルートだ。



ポカラ湖畔に写るアンナプルナ、マチャプチャレ吊橋の途中で、大きな荷物を両側に括り付けたヤク牛に出くわすと逃げることもできず、左右に張り出た鋭い角に刺されるかと恐怖を感じた。ルクラ出発時から腹の調子が悪く、いっこうに付いていけない。パダムが心配して先頭に付いてくれたり、戻ってきて私の世話をしたり大変な苦勞をかけた。若いジャパンを私専用の従者のごとくつけてくれたが、何回もダウン、結局途中の粗末な民宿に倒れこんだ。暖房もなく板の間に寝袋を広げて潜り込み、ガタガタ震えて寝るどころではない。極度に貧しい環境なので、暖房もままならないのだろうが、贅沢な生活環境に慣れた日本人には耐えられる状況ではなかった。

この様にエベレストトレッキングは途中で挫折して後悔の残る山行だったが、シェルパ達の従順さ、素朴さ、親切心に極めて感銘を受け思い出深い旅になった。

さて、COVID19(新型コロナウイルス感染症)が 2020 年の 1 月頃から中国で流行し始めたが、私は 2 月中旬からドイツ、イギリス、ベルギー、イタリアと代理店訪問をした。ジュッセルドルフのユーロショップ展示会を視察したが、中国人の旅行客も大勢見かけた。その頃欧州諸国はコロナに殆ど無関心だった。私は発生源の中国が欧州に撒散らしたと思っている。北米でも南米でも経済発展を遂げた中国人がいたるところに存在していた。発生源の中国がロックダウンの強権で抑え込んだが、その後世界中に広がった。中国はこの成果を誇り、逆にマスク、衛生器具、ワクチン等必需品を世界中に売りまくり恩を押し付けているが、そもそも中国がこの疫病を発生させた張本人で、まさにマッチで火をつけ、消火器を売りつける“マッチポンプ”商法である。中国共産党は悪徳商人と言わざるを得ない。

閑話休題。毎年パダムはネパールの夏のオフシーズンには日本の山小屋に出稼ぎに来ていた。大家族を養うには外国人ヒマラヤ登山者の案内だけでは食えないという。ところが、状況は一変した。ネパールも COVID19 の広がりで見込みに鎖国になり、外国人観光客は皆無、そしてカトマンズは窒息状態になった。パダムも失業して生活できないことがわかった。これはなんとかしないとパダムもジャパンもビルも路頭に迷う。日本の困窮所帯と苦しみの程度が違うのは現地を見ている私としてはよく分かった。そこでヒマラヤでパダム達に世話になった大学時代の山仲間 6 人を誘って義援金を送ることにした。2 回に分けて 40 万円何がしを送金したが、喜ぶことか、写真のようにシェルパ達 5—6 所帯の生活必需品(コメ、塩、豆)を大きな袋入りで購入することができ、餓死しないで済むと全員から礼が来た。スズメの涙のような支援だが、日本人に対するネパール人の印象を良くしたかなと思っている。



## 追伸

そこで今回、稲山会 OB に提案したかったのは下記の意図です。

1. 単にシェルパ救援の寄付金集めでは意義を感じる OB は少ないだろうから、世界的にコロナが終息したらヒマラヤトレッキング実行を計画している OB に呼びかける。
2. 実行の時期は早く今年後半以降になるでしょうが、其の費用の一部を現地で世話になるシェルパの責任者に先払いして、彼等の直近の窮状を救う。
3. 万が一、この前払費用が無効に成らない様に私が責任を持って監視し実行させる。
4. 以上に加え稲山会としてのヒマラヤ遠征計画を立て其れに組み入れていただければ、会としてのヒマラヤ山行の嚆矢になるだろう。以上の様に考えた次第です。

【打矢、横浜、2月13日午後3時45分発信】

打矢 OB の企画している、コロナ禍のシェルパ支援トレッキングツアーに参加したい会員、又は興味ある会員の皆さん、下記に問い合わせ下さい。

打矢之威 yukitoshi.uchiya@gmail.com

トレッキングツアーは参加者希望者が多いほど、この企画は具体化され、支援内容も大きくなります。よろしくお願ひします。なお、稲門山の会（OB 会）の取組みについては、役員会等で検討した上で、決定したいと思ひます。

稲門山の会代表 行方 正幸

### 【懐かしい思い出】

## (1) 山の会・映画と講演会のパンフレットのこと

今考えると昭和 30 年代が、登山は、登山活動的にも文化的にもピークだった気がします。

人口が多い国家と同じように、会員数が多いサークルはパワーがあります。我々の代は入会者は50名以上いましたが、徐々に減り一番顕著だったのは我々が4年の時の入会者は5~6名に激変し、それまでの勝手にふるいにかける方式を入会時から同志として遇する方法に改めた記憶があります。

映画会も3年のときが最後で、研究部組織も5つの部があるのに全体入会者が5~6名しかいないため、我々が卒業の翌年6は消滅してしまいました。

稲吉 豊 (S41年卒)

懐かしの山の会・映画と講演会のパンフレット  
大隈講堂を満員にするため、入場券販売のノルマがきつかった印象がありました。  
1962年(昭和37年6月)



映画はスベンサートレーシーの山だった記憶があります。  
講演：尾崎喜八、串田孫一氏



1964年(昭和39年6月) 東京オリンピックの年です



映画：アルピニスト岩壁を登る  
講演：串田孫一氏



## (2) 4人で挑む処女峰

この新聞記事は後藤さん(S49年卒)から、1971年パキスタン遠征の新聞記事を受取りました。学生時代の記録などに混じって黄色に変色したものが出てきたそうです。



合宿で「お花畑で見る夢は遠いカンチェカマナスルか」、「夜半の嵐に夢破れ 想いは遠くヒマラヤへ」と唄っていました。また、早大アフリカ縦断登山隊の「アフリカ天」は20名が収容可能で、富士山の雪上訓練で使用されていました。エクアドル・アンデス遠征隊の「ウィンパー天」は雪山で使用していましたが、「ヒマラヤ」や「海外遠征」は遠い遠い存在でした。仲間や先輩に恵まれ、友人、家族の協力もあり、遠征が実現しました。

Karachi 行きの JAL 便は羽田発。成田空港の開港前。ヨーロッパなどを經由して帰国したのは翌1972年、連合赤軍の浅間山荘事件で機動隊が突入した日です。「ヒマラヤ遠征」にはまだ夢や冒険心があった時代が終ろうとしていました。

豊田紳二 (S47 年卒)

## 【訃報】

杉村慎一様 (S41 年卒) がご逝去されました。

かねてより闘病中のところ、令和4年4月26日78歳に永眠され、5月4日に家族葬が行われました。杉村慎一様は大学4年生の時、山の会の副幹事長として春の南アルプス全山縦走隊(稲山会通信第44号参照)のリーダーとして活躍されました。

杉村慎一様のご冥福を祈り、ご家族の皆様には心からお悔やみ申し上げます

## 【編集後記】

稲山会通信第45号の巻頭言は、事務局長の名達一彦 OB(S51 卒)の「アルピニズム考」。1953年のヒラリーによるエベレスト初登、1980年のメスナーによる無酸素単独初登で「アルピニズム」は終わった。そろそろ稲門山の会も新しい時代の血液循環が必要と指摘しています。

特集Ⅰは2022年の総会の報告です。コロナ禍で稲門山の会の活動は Zoom やメールなどのオンラインを活用することにより継続し、登山活動についても個人山行を中心に現役と OB とも活発に行われました。今年度は是非とも会山行や合宿を復活させて欲しいものです

特集Ⅱは「谷川岳と上越の山々」です。はじめに宮野準治 OB(S35 年卒)の幽ノ沢中央壁左ルートに登攀です。このルートは今でも困難且つ危険な第一級のルート、それを初登攀後間もない1960年台に登攀とは、驚愕のビッククライムです。次に打矢之威 OB(S37 年卒)の、息子さんたちと行った谷川岳縦走時のアクシデントを軽妙な文体で書いた「幽ノ沢支流滝の転落事故」、三番目は行方の70年代に流行した継続登攀(一ノ倉沢烏帽子奥壁から滝沢第3スラブへ)の記録、四番目は若手の齋藤拓海 OB(R2 年卒)らの万太郎谷・本格的な沢への挑戦、ラストは現役の小野丈君の秋の谷川岳単独行と、バラエティーに富んだラインナップです。

さらに、コラムの連載は広瀬舜一 OB(S38 年卒)の「ピンコロ人生の健康管理」は今回で最終回を迎えました。長い間ありがとうございます。金子治雄 OB(S41 年卒)の「岳人列伝④田部重治」の「登山の極致は詩人として哲人として生活を行為すること」の言葉には感銘を受けた。

今回のお知らせは、打矢 OB が自費出版した「私の山登りと海外体験記—人生記録—」の紹介と、いま取り組んでいる「ネパールの山岳案内人シェルパ族の窮状」を支援する活動についても掲載させていただきました。コロナの感染対策については途上国の人々が、我が国以上に困難を極めており、打矢 OB の活動も皆さんの暖かい応援を必要としています。そして、「思い出」として1960年代の山の会主催の講演会・映画会、70年代のヒンズー・ラジ遠征の新聞記事を掲載しました。山の会の歴史は恐るべし。稲山会通信第45号をご堪能下さい。

次回の特集は「海外の山々」自薦他薦の投稿お待ちしております。行方正幸 (S50 年卒) 記